

以上甚だ簡略ではあるが、こゝに本書出版の概略を記してその紹介に代ふることとする。この名著を東洋史専門家のみに限らず、敢て一般史家に向つて一讀を薦める。(岩波書店發行、四六倍判、定價參圓五拾錢)(小野)

### ○西洋近世史學史序説

千代田 謙著

現代ほど歴史に對する一般的な關心が昂揚された時代はない、とは最近屢々人の語るところである。

このことは、「歴史の世紀」と誇稱せられた前世紀の史學がそれに固有な特質のために主として實證的・文獻學的な線に沿うて異常な進展をとげたことに對して、最近に至つて漸く人がそれに對する理論的跡づけを試みようとするに至つたことに他ならないといふ風にも説明されうるのであらう。云はゞ十九世紀史學の黄昏に乘じて、ミネルバの梟がその飛翔を始めたのだとでも云へるかも知れない。

然しながら、このことは、更に深いそして現實的な事情に基いてゐるのではなからうか。現代社會が經驗しつゝある動搖と變化とが、人をして、現代が何か新しい未來に直面しつゝあること、すなはち現代が一の過渡期であることを感ぜしめ、そして現代のわれわれが歴史的な存在であることを意識せしめるがためではなからうか。

いま、このやうな事態に於いて、廣島文理科大学助教授千代田謙氏が、この「西洋近世史學史序説」を發表されたことは、まことに

に意義深いことと云はねばならないであらう。著者千代田助教授は、すでに數年前、「西洋史講座」(雄山閣發行)に於いて「近世史學史」を講述せられ、僅々百數十頁の紙數のうち、よく文藝復興期より十九世紀に至る史學史風の變遷の跡を尋ねられたのであつたが、今は、その舊著の第一章すなはち「近世初期史風の概観」に相當する部分をば、はるかに詳悉に且つまたはるかに完全な形に於いてと、のへられてゐるのを見ることが出来るのである。しかも尙、本書に題して「序説」と稱せられたのは、客觀的に、「こゝ」に取扱はれたる、ルネサンスより略々第十八世紀前半に亙るところの「時代そのものの史學史的性質」によるものであるとともに、また主觀的に、「著者の關心の第十八・九世紀を中心とせる見地」に基くものに他ならない。

さて、本書の内容とその構成を通觀してみよう。著者は先づ「史學史の一問題」と名づけられたその「緒章」に於いて、「歴史と史學理論、所謂哲學者の史學史と歴史家の史學史、史學史と思想史・文化史、等々およそ史學史にとつての根柢的な諸問題を問題としつゝ、みづからの歴史把握と、そしてこれと相關的に本書の「目指すところ」の「遡遠な」意圖とをば、提示せられてゐる。

この「緒章」に續く本論は、章に分たれること十、また各章は更に二つづつの節から成つてゐる。

第一章は、「人間主義への途」、「最初の人間主義者」と云ふ二つの節に分たれ、こゝでは、「人間を觀直す者」としての「最初の近代人」の「史的態度」が論ぜられ、續いて「人文主義の開拓者」とし

て」のペトルルカ、ポッカチオが取扱はれてゐる。次いで第二章に入れば、此の「類型の相異つた」二人の代表者によつて「切り開かれた」ヒューマニズムが、どのやうな史風を樹立し、どのやうな「修史事業」を収めえたか、が、「フロレンス史派」と「伊太利諸市」とに分つて詳論されてゐる。第三及び第四の兩章に跨る「人爲人力と盛衰榮枯」の項は、もつぱら、「政治復興主義者」としてのマキアヴェリの史論と、「人間を冷視する者」としてのギッチャルディニの史風とに與へられ、これによつて一方「一種の國家・政治史を通して、歴史は繰返すてふ時處を超越する普遍的準則を求めん」とするものと、他方「一種の世界・政治史を通して、歴史の變じて息まぬ特殊相を把へん」とするものが、對照的に綴られてゐるのを見る事が出来る。

以上、第一章から第四章に至る部分に於いては、主としてイタリア諸都市を中心とする文藝復興期の史風が取扱はれてゐるのであるが、續いて著者は、「ルネサンスの峠を越えて」（第五章第一節）「人文興亡の行方」を尋ねられる。すなはち、次にイタリヤの人文主義の地域的擴大化とその「諸國民化」（第五章第二節）が論ぜられ、「文化の一大潮流が、アルプスの此方から放射狀に流れ出づる」跡が辿られてゐるのである。

次の第六章は、「神を改めて仰ぐ」人々——ルテル、カルヴィン、ツウィングリ、メランヒトン等の「宗教改革者の歴史觀」（第一節）と、同派の「歴史敘述」（第二節）とに當てられ、これによつて「宗教改革の史學史的意義」が考へられてゐる。これを

年代的に云へば、以上は、十六世紀前半までの史學史に相當する。

「ルネサンスの峠を越えて」「宗教改革」の時代を過ぎれば、西歐社會は諸國家が中央集權的統一の國民國家として確立されてゆく時代に入り、それぞれの國民は、その國民としての特性をいぢるしくする。そこで「十六世紀後半より十七世紀前半に至る」史學史は、伊太利・西班牙（第七章第一節）、佛蘭西（第七章第二節・第八章第一節）、英國（第八章第二節）と云ふ風に、それぞれの國に分たれて説かれ、「智情意の國民化」「史風の各國化」が強調されてゐるのを見る。之に續く「十七世紀後半より十八世紀初期に及ぶ」時代は、所謂合理主義精神が修史事業にも滲透してゆく時代であり、従つて「歴史と合理化」（第九章第一節）、「考證學的史風の發達」（同第二節）などの問題が起つてくる。「思想と事實」と名づけられた第九章の取扱ふところは、これであつて、「この期の歴史が」「いかに合理的傾向を繰りつゝ、あつたかが、此處に「瞥見」されてゐるのである。

最後の第十章は、もつぱら、「新しき人間科學」を説いた「孤獨の靜觀人」ヴィヨに捧げられ、これによつて、「時代の千であつた」と同時にまた「一步進んで寧ろ十九世紀的なる風手を呈して居た」ところの彼の「孤獨なる偉大さ」が稱揚されてゐるのを見る事が出来る。

以上、スケッチしたところによつても明かな如く、本書は決して史學の理論・方法論の歴史を論じたものではない。讀者は、斯

くの如きものを本書に求めてはならない。むしろ著者は、各時代の代表的な修史家の歴史敘述をば史料として、「史的思想といふ」視角から、人間の思想生活・文化生産の行動を眺め、そこに、人間の具體的な一断面を掴まうと「されるのである。それ故、これは、歴史思想にティンシュテルンクをおいた一種の思想史・文化史に他ならない。「史的思想の具體的・全體的なる了解」、「人間生の一面としての歴史の歴史」——これこそ、著者の「目指」される「念願」なのである。

尚、附録として收められた、「アウグスティヌスの羅馬史論」及び「モンテスキュウの羅馬史論」の二篇は、既に先年諸雑誌に發表されたものであるが、前者は「本書本文の前編とも伏線とも謂ふべき性質を帯びる故に」、また後者は「本文を結ぶと共に、後續史學展開への連繫を暗示する性質を帯びる故に」、敢へて「併せ収録」されたものであつて、共に本書の價値を増すものであらう。

最後に、此の見事に彫琢された「史學史序説」を通讀する幸ひを得たわれわれは、「著者の關心の」「中心」をなすと云ふ第十八・九世紀史學史の公刊される日が一日も近きことを望む念を禁じえないものである。(東京、三省堂刊行、定價四圓)(中山治)

OCLIO, introduction aux études historiques.

T. VI. Le XVII<sup>e</sup> siècle, par H. Sée et A.

Rebillon. Paris. 1934.

『學術研究に於ける専門分化は、指導的理念と基礎的事實とを失はざる限りは、一の進歩である』だが『リセ(Lyce)でのドグマテ

イクな解釋と、大學での批判的な研究との距離は日々に著しくなりつつある』

『若き學生が混亂せる刊行物の氾濫や史料の大洋の中にさまよふ時』其處にならにかよき指導がなされねばならない。歴史研究はアヴァンチュール(aventure)の性格を擔ふべきものであつてはならぬ。

かゝる過渡期に必要なものは單なるText-bookの類や所謂Histoire generalと呼ばれる概説書ではない。むしろHistoire intégralな性質のHandbuchもしくはCompanions to studiesであるべきであらう。

以上が簡勁な序言の中でCharley氏が述べてゐるこの叢書Clioの意圖である。

フランスにも從來すぐれた概説書がないのではない。LavisseyやRimbaud, Glotzの名と共に記憶せられてよい概説的叢書や、多數の卓越せる學者の參與せるL'évolution de l'humanité乃至はPeuples et Civilisationsの如きものをあげることは出来る。だがこれらは決して充分な意味でHandbuch的な性質のものではない。それはすぐれた著作であつても便利な手引書ではない。Clioはその後者への試圖である。従つてこれは特異な構成を有してゐる。その第六卷、「第十六世紀」を例にごく簡単に紹介しよう。

その持つ意味よりして三つの部分に分けらる。

(一) 項目別による概説的描述——中世と近世との時代區分の問題がどうであらうと十六世紀のもつ重要性は無視することは出